

ヤマトタマムシの寄主としての落葉ブナ科植物（ナラ枯れ木における脱出と産卵）

雛倉正人*

Deciduous oak trees as host plants of *Chrysochroa fulgidissima fulgidissima* (Schönherr, 1817)

Masato Hinakura*

はじめに

ヤマトタマムシ（タマムシ）*Chrysochroa fulgidissima fulgidissima* (Schönherr, 1817) は著名な甲虫であり、幼虫の餌は主にサクラ類やエノキ *Celtis sinensis* Pers. が知られているが、コナラ *Quercus serrata* Murray やクヌギ *Q. acutissima* Carruth. の利用についての記述は、日本産タマムシ大図鑑（大桃・福富，2013）以外見当たらない。筆者は、川崎市麻生区のナラ枯れを起こした雑木林において、コナラ伐採木からの脱出とクヌギ切り株への産卵を確認したので、報告しておきたい。また、シラカシ *Q. myrsinifolia* Blume 伐採木に産卵中の個体も撮影したので、併せて記録する。

観察記録

1♀，麻生区黒川（黒川海道特別緑地保全地区），15. VI. 2024，雛倉正人撮影（図1、図2）

1♀，麻生区上麻生（山口白山公園），27. VII. 2024，雛倉正人撮影（図3、図4）

1♀，麻生区はるひ野（黒川よこみね特別緑地保全地区），11. VII. 2020，雛倉正人撮影（図5、図6）



図1. コナラ伐採木からの脱出状況



図2. ヤマトタマムシの脱出が確認されたコナラ伐採木



図3. クヌギ切り株への産卵状況



図4. ヤマトタマムシの産卵を確認したクヌギ切り株の状況

*特定非営利活動法人 かわさき自然調査団

Kawasaki Organization for Nature Research and Conservation



図 5. シラカシ伐採木への産卵状況



図 6. シラカシ伐採木への産卵を確認した環境

ヤマトタマムシ脱出との遭遇は偶然で、筆者は散策中、足元のコナラ材に脱出口から甲虫の眼を見出した。しばらく観察していたら、樹皮を噛み破り脱出に至った(図1)。周囲の斜面には、ナラ枯れを起こした倒木や伐採痕があり、切り株の際に転がっていた材には菌類が生えていた(図2)。また、クヌギ切り株(図3、図4)のあった公園は市街地に近く、ナラ枯れ処理に伴う玉切りされた材が多く残置されていた。

常緑カシ類の利用は文献にあるようだが、ヤマトタマムシが来ていたシラカシ(図5、図6)には、市内では少ないルリボシカミキリ *Rosalia batesi* Harold も見られた。

考察

ヤマトタマムシ(本種は、中国・台湾・東南アジア・韓国や日本の島嶼に亜種が知られており、日本本土産が原名亜種になる)に関する記述を、最近の権威ある図鑑などから改めて検討した。

日本産タマムシ大図鑑(大桃・福富, 2013)

では、種ごとの解説中で寄主植物として、エノキ・リュウキュウエノキ・ケヤキ・サクラ類・カシ類・カキ・クワ・ハリエンジュ(ニセアカシア)が挙げられている。しかし16～17頁の生態図版においては、「日本を代表するタマムシ」として、コナラに産卵する成虫・クヌギ材中に穿孔する幼虫の画像がある。東京都レッドデータブック 2023 本土部(松原, 2023)では、「ケヤキ、エノキ、サクラ等の大木の枯れた部分に産卵し、幼虫は樹木の内部を食べて育つ」と記述されている。神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006(平野, 2006)の記述は、「エノキ、ケヤキ、サクラ類、カシ類、カキ、クワ、ニセアカシアなどをホストとする」とあり、日本産タマムシ大図鑑(大桃・福富, 2013)の内容と似ている。「カシ類」に *Quercus* 属として落葉樹も含むかは微妙であるが、カシといえば常緑の照葉樹を指すのが素直な解釈と筆者は考える。朽ち木にあつまる虫ハンドブック(鈴木, 2009)はかなり具体的で、「メスはエノキ・ケヤキ・アカメガシワなど広葉樹の立ち枯れや伐採木、生木の朽ちた枝や心材部を訪れ、亀裂や他の昆虫が開けた脱出口に産卵する(中略)幼虫は腐朽材を食べる。特に白色腐朽材を好み、コクワガタの幼虫と一緒に見つかることが多い」という記述があった。

今回脱出を観察したことで、コナラ伐採木でヤマトタマムシが成虫まで育った証拠が示された。産卵の場合は、昆虫自体に嗜好性があっても、それが成長を全うすることは必ずしも保証しない。脱出を確認した伐採木は、切り株に比べて細いが、玉切りされた伐採木であり、腐朽していた。産卵時点で木が生きていたか否かはわからないが、状況から細い立木でなく、大木の高所の太枝の一部である可能性が高い。

おわりに

ヤマトタマムシは華美な甲虫で観察対象として目立つ。しかも地方版レッドデータブックにも載っており、東京本土部で準絶滅危惧(松原, 2023)、神奈川で要注意種(平野, 2006)とされていることから、都市緑地の保全において注目される昆虫といえる。サクラ類やエノキにつくことから、薪炭林由来でない緑地、具体的には市街地の公園・社寺や河畔林にも見られる昆虫である。

昨今ナラ枯れにより衰弱木が多く生じたことから、本種が増えている可能性もある。雑木林は川崎北部の丘陵地では基調となる植生であり、本種の動向は注目される。観察の眼が増え、より深く生態が明らかになることを期待したい。

引用文献

平野幸彦, 2006. 甲虫類. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 編, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006, pp. 343-367, 神奈川

県立生命の星・地球博物館, 小田原.
松原豊, 2023. ヤマトタマムシ. 東京都レッドデータブック 2023 -東京都の保護上重要な野生生物種 (本土部) 解説版-, p. 649, 東京都環境局自然環境部.
大桃定洋・福富宏和, 2013. 日本産タマムシ大図鑑, 206 pp., むし社, 東京.
鈴木知之, 2009. タマムシ科. 朽ち木にあつまる虫ハンドブック, pp. 32-33, 文一総合出版, 東京.